

NVC Monthly

同好会ニュース

寝屋川映像同好会会報

第24号(20110506)

発行 竹田幸男



新しい寝屋川市 映像協会の設立

4月24日午前10時、総合センター視聴覚室で新しい「寝屋川市映像協会」設立総会が開かれ、「映像寝屋川」と映像同好会とで設けた「新寝屋川市映像協会設立協議会」が作成した議案書を基に議事を進め、会則の改正、映像協会役員、23年度予算案、本年度活動目標と年間行事の提案などについて、ほぼ原案

新組織の発足を祝して「乾杯」

通り可決され、新しい寝屋川市映像協会が発足しました。

「寝屋川市映像協会」は従来単一の組織でしたが、今回「映像寝屋川」と改称した上、私たちの「寝屋川映像同好会」と共に新たな映像協会を設立し、今後他の映像団体が参加できる体制ができたことで、寝屋川市を中心とした映像活動がさらに進展することが期待されます。

午後はその会場で映像寝屋川と寝屋川映像同好会との初の合同例会を開催、同好会からは小笠原さん「錦秋慕情」、谷さん「子供たちの国際交流」、合同作品「元気 元気の寝屋川」を提出して注目を受けました。

夕方からは寝屋川駅前「坐・和民」に席を移し、両会のメンバーが新しい組織の発足を祝って祝杯を挙げました。

平成23年5月例会

例会の窓

日 時 平成23年5月6日(金)

13:30~16:30

場 所 寝屋川市民活動センター4階 こども室

出席者 新井 天野 石田 小笠原 梶本 竹下 竹田 谷 田淵 田口
佐伯(11名)

欠席者 竹嶋(50音順 敬称略)

例会次第

1. 各会員の最近の活動状況・情報交換

- (1) 竹嶋さんは帰省のため欠席。(連絡あり)
- (2) 佐伯節子さんが、竹田会長からの当会への入会お誘いを受けられ、例会に参加された。娘さんの結婚式・お孫さんの撮影などをされており、ビデオ撮影・編集に興味をお持ちです。今日入会され、来月の例会・嵯峨野撮影会にも参加されます。

2. 報告・連絡・協議事項

(1) 新寝屋川市映像協会設立総会の報告

- ・4月24日(日)に開催され、設立経過報告、会則の改正、役員選出、23年度予算を原案通り可決しました。詳細は議案書で確認のこと。
- 参加は天野、新井、小笠原、竹嶋、竹田、谷の諸氏。
- ・同日夕方有志による懇親会を実施した。

(2) 撮影会プロジェクトチームからの報告(天野さん、小笠原さん)

- ・映像協会撮影会の案内。
- ・実施日 6月8日(水)、雨天の場合 6月10日(金)。
- ・場 所 新緑の嵐山・嵯峨野
- ・当会は、7時59分寝屋川発、快速急行 最後尾車両で移動(石田さんは別行動)
- ・参加者 8日(天野、新井、小笠原、佐伯、竹田、谷)6名
10日(天野?、新井、石田、小笠原、佐伯、竹田、谷)7名
- ・参加、不参加の変更は、最終5月20日までに、メールで天野さんまで連絡ください。
- ・撮影会の詳細は、案内状をメール送付します。各人確認のこと。
- ・撮影会の後に、「編集講習会」を予定(竹田さん)
- ・同じ場所での撮影会なので、映像作品を鑑賞し合って勉強の場としたい。

(3) 映像フェスティバルチームからの報告(竹田さん、新井さん)

- ・実施時期 設立総会の目標に沿って平成24年5～6月頃。
 - ・会場
 - ・アルカスホール 場所は駅に近く、新しい会場で条件は良い。費用が高いが、ぎりぎり実施可能か?(映像寝屋川14作品、同好会5作品として)
 - 市民会館小ホール 座席平面と駅から遠いのが難点、費用は安い。
 - エスポアール 座席は階段式、会場費用は安いが場所が分かりにくいことと、8週間前からしか予約受付をしないのが難点。
 - 総合センター講堂 駅から遠いのが難点。
- 会場の決定は今後の検討課題。

(4) 忘年会プロジェクトチームへの推進依頼。

映像寝屋川のプロジェクトメンバーと連絡をとり推進していただく(石田さん)。

(5) 「NVC Monthly」の記事執筆者の件。

- ・次回担当 天野さん。

3. 作品発表

「川床」 新井さん 4分13秒

京都鴨川、以前、詳しい話を聞いたがカメラを持ち合わせず、今回改めて撮影したとのこと。始めに鴨川に棲む鳥たちの生態、夜になって雰囲気良く出ているが最後が急に終わった感じ、余韻があれば良かった。

「かたなの博物館」 新井さん 9分47秒

平野郷撮影会の作品、かたなの博物館の研ぎの過程だけを追った作品、研ぎながらの説明を根気よく追って声を生かして被写体を良く表現されている。我が家の折れた刀を映像に取り入れたい。可能であれば、刀鍛冶から撮影したい。下地研ぎから仕上げ研ぎの過程をぜひ撮りたい。再度、平野郷で挑戦したい、との作者の意向です。

スイス「雨のハイキングと高山植物」 天野さん 8分20秒

協力者の映像、テレビの映像も加えてきちんとした構成でまとまっています。ハイキングについて歩く、という忙しい場面なのに一緒に歩く仲間の前に回って撮影するのは体力を必要とするし、電車など低いアングルからの撮影で大き

さを表現できています。花々は三脚を使って安定な映像に仕上げられています。本人は、あと2分位短くしたいと考えている、とのこと。

トップの静止画をテレビからの映像を使わず自分で撮影したものにすれば、コンテストにも出品できるでしょう。エンディングのキャストなどは、終わった後に入れるより最後のナレーションとともに出したほうが良いと思われます。

・アングルもよく、質の高い作品。次回の発表会作品に決まりか。

「屏風岩公園」 谷さん 4分17秒

高さが感じられるいい風景をとらえています。残念なのはせっかくのナレーションが聞こえにくいこと。BGMを最小にしたが上手くいかなかった、とのことです。

子画面は、ファイルに登録しインサートラインに配置すると安定する。

・全体的に、BGMが途中でぎくしゃくしている。パソコンの動きが悪くなっているの、メールなどをCドライブから他に移すとか、クリーンアップ、デフラグ、エラーチェックをしてみてもどうか。

「兵庫県立フラワーセンター紀行」 小笠原さん 6分5秒

静止画の作品の話が何度かあったので、アルバム形式のものを作ってみた、とのこと。

4. 会員の当面する問題点の質疑応答

BGMに関して

- ・映像を優先すべき。
- ・BGMが映像より長ければ、中間をカットし、始めと終わりを活かすようにしてはどうか。

デジタルレコーダーの音質は良い。利用を検討してはどうか。

レコーダーからUSBメモリーに取り込み、パソコンに取り込むのもよい。

5. 次回例会

- ・6月3日(金) 13:30～ 於：寝屋川市市民活動センター 4階 こども部屋。
- ・カメラ担当：田淵さん。



『人生の扉』

作詞*作曲/竹内まりや

天野 忠一

私がこの曲に出会ったのは2年前です。私は、ラジオを聴きながら眠りにつくのが習慣となっているのですが、当日も夜遅くまさに眠りに入ろうとしているところに、この曲がラジオから流れてきました。

出だしの歌詞の記憶はないのですが、あるところで眠気から、急に目が覚めたことを今でも覚えています。

それは、曲の2番目の歌詞

満開の桜や 色づく山の紅葉を
この先 いったい何度 見ることになるだろう
ひとつひとつ 人生の扉を開けては感じるその重さ
ひとりひとり 愛する人たちのために 生きてゆきたいよ

を聴いたときでした。

もし自分自身が、若い頃にこの曲を聴いていても、そんなに感じるものはなかったかも知れませんが、この年齢に達したということもあるのでしょうか、この歌詞にことばの重みを凄く感じるものがありました。

目が覚めてからは、「誰が歌っているのだろう」「何という曲なんだろう」と思いながら、曲の最後まで聴くことになったわけですが、終りになっても曲の紹介はなく、パーソナリティは次の話題に移ってしまいました。(曲の最初に紹介があったのですね)

仕方なくその日はそのまま眠りについたのでありますが、翌朝からこの曲のことで頭がいっぱいになり、1日中曲を探す方法を考えました。せめて歌手名がわかればと思ったのですがわからず、知る手段として「放送時間帯と放送局」は、わかっていましたので、「放送局に問い合わせ」をとったのです。

しかしこれは少し大胆すぎる。もし問い合わせをしたところで教えてもらえるはずがない。

しかも大の大人が、どのように問い合わせをしたらよいのか。問い合わせをすること自体が恥ずかしいとなり、結局人の力を借りることになってしまいました。

それは、私の子供でした。長男は仕事上放送局との関係もあり、放送は東京のキー局からの放送でしたので、長男が運よくその放送の担当ディレクターと友人だったということもあって、思ったよりも簡単に聞くことができ、曲名と歌手名を知ることができました。

それが、この『 人生の扉 / 竹内まりや 』でした。

曲名が知りたいがために、ずいぶん大きなことになってしまい、考えれば考えるほど恥ずかしい感じがしているところですが、それほどまでもして知りたいと思ったのは、この詞、メロディに強くひきつけられたということではないでしょうか。



春がまた来るたび ひとつ年を重ね
目に映る景色も 少しずつ変わるよ
陽気に はしゃいでた 幼い日は遠く
気がつけば五十路を 越えた私がいる
信じられない速さで 時は過ぎ去ると知ってしまったら
どんな小さなことも覚えていたいと 心が言ったよ

I say it ' s fun to be 20
You say it ' s great to be 30
And they say it ' s lovely to be 40
But I feel it ' s nice to be 50

満開の桜や 色づく山の紅葉を
この先いったい何度 見ることになるだろう
ひとつひとつ 人生の扉を開けては感じるその重さ
ひとりひとり 愛する人たちのために 生きてゆきたいよ

I say it ' s fine to be 60
You say it ' s alright to be 70
And they say it ' s still good to be 80
But I ' ll maybe live over 90



君のデニムの青が 褪せてゆくほど味わい増すように
長い旅路の果てに 輝く何かが 誰にでもあるさ

I say it ' s sad to get weak

You say it ' s hard to get older
And they say that life has no meaning
But I still believe it ' s worth living
But I still believe it ' s worth living

ところで、日本語の部分はよく理解できるのですが、問題は簡単なスペルが並ぶ英語の部分の意味が少し曖昧な理解になってしまうところです。

そこでWeb上の翻訳ソフト、また新たに購入した翻訳ソフトを使って和文に直しますが、どうも直訳すぎてこれでいいのかどうかと考えてしまいます。Webで『人生の扉』と検索しますと、ずいぶん英語の部分が翻訳されたものが出てきます。しかし、この詞を書いた竹内まりやさんの本当の思いの日本語は、どんなことばになるのでしょうか。一度本人に聞いてみたい思いもいたしますが、これはとても無理でしょうね。

私は、この曲が非常に気に入っておりますので、何とかこの曲に画像（動画・静止画）をのせることができないかと思い、無理やりに作りあげたビデオが2009.9月の例会で紹介させていただいた家族と花の写真、そして一部動画でした。（今ひとつのビデオでしたが）

今でも『人生の扉』の曲をよく聴きますが、あの自作ビデオを見ながら長い人生の一部ではありますが、その時、その時の扉を開けてきた結果、今の自分があるのだということを思い出し、感慨にふけっているところです。

いくつになっても、基本的には自分であることには変わりありませんが、その年齢を迎えて考えさせられること、いくら年を重ねていっても、その時が一番いいと思える人生を送っていきたいという思いを、この曲は歌ってくれているように思います。まさに人生の応援歌ではないでしょうか。

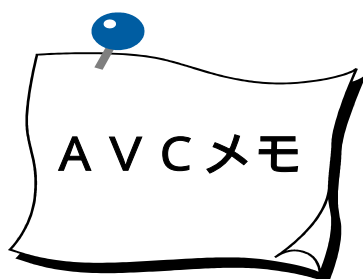
最後に、2007年4月NHKで放送された『SONGS』での彼女自身の語りから抜粋した一部分を紹介します。

青春を “おろし立てのジーンズ” にたとえるとすると、
年を重ねるにしたがって、そのデニムの “青” も変化していきます。
時には糸がほつれ、穴があくこともあるかも知れない。
でも、若い頃にはなかった “深い味わい” が生まれているはずですよ。
それはどこか私達の人生に似ている・・・そう思いませんか。
50代を迎えたことで、今までとは違って見えてきた “生きる” という

ことそのものが、ふと歌になったのが『人生の扉』です。

何歳になっても、その都度 その年齢の私が好きだと思える自分でいたいと感じています。

新しい扉をあけていく勇気が持てる自分でいられるように、また聴いてくださる皆さんにとっても そうであるように、という願いも込めて作った歌です。

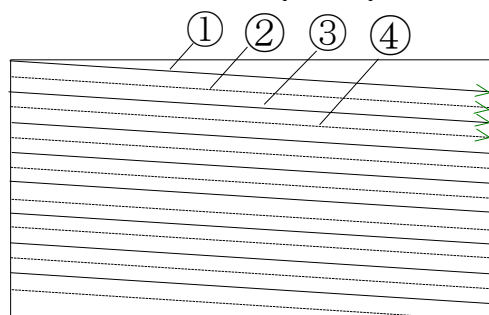


1080/60pとは?

竹田 幸男

昨年、PanasonicのハイビジョンビデオカメラHDC-TM700が発表されたとき、そのメニューには1080/60pという映像フォーマットがありました。当時ビデオサロン誌上で、素晴らしい映像だと絶賛されたのを記憶しています。60pというフォーマットとは何でしょうか。

通常のテレビ画面は、CRT(ブラウン管)の場合、図の実線のように1本目の走査線の上を光の点が左上の角から始まって画面の右端まで走り、次は破線の部分を1本分飛ばして3本目の実線の上を走り、奇数本目ばかりの走査を繰り返して右下の角まで到達すると(ここまでを1フィールドと言い、約60分の1秒間です。)、今度は左上から2本目(破線)の上を左から右に走り、次は4本目(破線)を右に走る、というように破線部分(偶数本目)



ばかりを走査して2回(2フィールド、約30分の1秒間)で全ての走査線の走査を終えるものです。これを飛び越し走査(インターレース)といい、英語の頭文字を取って「i」で示します。2フィールドで完全な映像1コマが表示でき、これを1フレームと言います。

このインターレースに対して、走査線が1本おきではなく、1本目の実線部分を走査し終わったら次は2本目の破線の部分を走査する、というように

左上から始まり右下で終わったときに1枚の映像(1フレーム)が完結するのが順次走査(プログレッシブ)で、英語の頭文字を取って「p」で示します。この1フレームを、インターレースの場合の約30分の1秒でなく、約60分の1秒の間に済ましてしまうのが60pです。半分の時間ですべての走査線を走査するので、時間あたりの情報量は2倍になり、密度が高い絵になります。

インターレースでは人間の目の残像で2枚の映像を合成していることになります。また隣り合う実線部分と破線部分とでは1フィールドの走査時間分ずれて見えることになります。動いている物を見たときにはここで隣の走査線の部分とはずれが起こることになります。いろいろな理由でインターレースはプログレッシブに比べ解像度は0.7倍くらいと言われていています。逆にインターレースをプログレッシブにするだけで1.4倍に解像度は上がるわけですから、ビデオサロン誌が驚いたのもうなずけます。

しかし、今のところこの1080/60pと言うフォーマットはAVCHD規格では決まってないので独自規格と言うことになっています。またこれを編集できる映像ソフトも今はありません。たとえばEdius Neo 3やEdius 6では1080/60pというフォーマットは取り込みはできますが、編集して完成した映像は1080/60i(インターレース)になってしまうので、せっかく60pで頑張ったのが無駄になってしまいます。

さて、最初にCRTのテレビの場合、と言いましたが、この場合走査するスポット(光の点)は1個(カラーの場合は赤・緑・青の3個)で、この光の点が先の図のように一筆書きのように動いていくのですが、液晶テレビやプラズマテレビは様子が少し違うようです。CRTテレビ画面をビデオカメラで撮影すると全面に映像が映らず、一部分だけが映り、その映った部分が移動していく、という経験があります。液晶やプラズマではこのようなことが起こらず、全面がきれいに映って見えます。画面の書き換えがかなり短い時間で行われているから、このような違いが出るのだらうと思います。液晶やプラズマの発光はX・Yのマトリクス状に配置された信号線からの信号の組み合わせで制御されますから、画面の走査はCRTの場合とは状況が異なっているようです。この辺のタイミングはどのようなになっているのか、もう少し勉強してみたいと思います。

今の世の中、テレビやモニターでは、インターレースで入ってきた映像信号を擬似的なプログレッシブ映像に加工しているものが多いようです。きれいに見せるための努力がうまく実を結んでいるか、メーカーの腕が問われる所です。下手をすれば、ちらちら感が出たり、いろいろ副作用が出るのではないかと、自分の持っている機器がどのような技術に依っているのか、気になるところです。